



山木屋太鼓

山木屋太鼓 (info@yamakiya-taiko.com)

和太鼓奏者遠藤元気 (g-pro@genki-endo.com)



Vol.
24



地域や人々の
いのちの躍動を奏でる

自然豊かな山々で、動物たちの宴を強弱で伝える曲「星祭り」。人々が山木屋地区を離れ、人がいなくなった山林や田畑でぐんぐん生い茂る雑草の生命力を表現した曲は「千草(ちぐさ)」。故郷・山木屋地区の木々の動きや日差しの色、自然の様子を、笛の音も交えて、躍動的に演奏する山木屋太鼓。ステージでは、聴衆を魅了するオリジナル曲が次々に響き渡ります。2001年から前身となる団体「山木屋太鼓クラブ」として活動を始め、22年目を迎えます。2011年の東日本大震災後、計画的避難区域に指定(現在は解除)され、住民が避難するという困難を乗り越え、住民や避難者ら、聴衆を勇気づける演奏を国内外で行っています。中心となって活動し、個人でも演奏活動をしている遠藤元気さん(34)に、活動の歴史とこれから、そして山木屋太鼓の魅力を伺いました。

遠藤元気さん=川俣町山木屋で



年上が年下の面倒を見るのは山木屋太鼓の伝統

山木屋太鼓の歴史

山木屋地区の歴史は古く、町村制が施行された明治22年に山木屋村となり、その後、昭和30年に川俣町に合併しました。山間高冷地で農業には不利な部分も、住民が協力して知恵を絞って収量を上げ、地区内でのつながりを深め、大人から子どもまで、豊かな日常生活を送る取り組みをしてきました。また、古くからお盆の



地区名が名称についた「山木屋太鼓」

時期に、地域のみんなが集い、歌い、踊り、太鼓や笛を鳴らす山木屋甚句、ヒコーキ踊りがあり、それを伝える「山木屋やぐら会」という組織がありました。その伝統文化を子どもたちへ伝えるべく「盆踊り伝承教室」が開かれるようになりました。そして山木屋やぐら会の親子組織として2001年に「山木屋太鼓クラブ」が誕生。主に子どもたちを対象に、太鼓の練習や演奏を通して、地元の歴史や文化の伝

承、コミュニティや仲間作りを図るのが目的です。当時は、地区でも子ども数の増えていた時期。参加する子どもの数は年々増加し、地域の祭りや、コンクールにも参加し、クラブ活動を通じて子どもたちが成長していきました。

やがて、メンバーの成長と共に活動の幅を広げる目的で、2009年には「クラブ」を取って名称を「山木屋太鼓に変更。年代別にチーム分けをして、「朱雀(すざく)」「社会人」「山猿(やまざる)」「学生」「鼓孤(こご)」「鼓魂(こたま)」子どもチームで活動。チームごとに特徴的な衣装も作り、イベント演奏の会場を盛り上げる工夫も重ねました。

「最初、川俣町にあった別の太鼓団体(現在は活動していない)に母と姉と私が参加。その後山木屋太鼓クラブが発足し、その立ち上げの一人が母でした。母の生まれば山口県で、結婚して全く文化の違う山木屋に来ました。地元の人たちと様々な活動を積極的におこなっていましたね。最初は太鼓もなかったたので、助成金もなかったりして徐々に太鼓を増やしていき、活動の幅も広がっていきまし」と遠藤さん。

山木屋太鼓は故郷の自然をテーマとした創作曲を大切にしています。はじめは、遠藤さんよりも上の世代の方々が曲を

作っていました。遠藤さんは19歳で初めて曲を創作。「山木屋だからできること、山木屋の特色があるものを表現したい」と思いましたという。この頃は全国で和太鼓ブームが到来。県内では、福島太鼓フェスティバルや、飯坂温泉太鼓祭りにも参加するようになり、他の和太鼓の団体との交流も広がっていきました。

共に太鼓を打つ者同士、つながりが生まれ、刺激し合いながら、交流が深まっています。



結成当初の山木屋太鼓クラブ



切磋琢磨しながら練習を重ねる（震災前）



盆踊りでの演奏も伝統になっている

2011年、 東日本大震災が発生

2011年3月11日。山木屋地区にも
激震が走りました。東日本大震災の発生
です。

「その時、当時の職場にいて、とにかく
揺れがすごく、その時の感覚は今でも鮮
明に覚えています。家自体は屋根瓦が落
ちたぐらいで、家の中は悲惨でしたが、整
理すれば住める状態。『太鼓の練習は、落
ち着いたらやろうかな』と考えてはいた
のですが」と遠藤さん。数日後に飯坂温泉
太鼓祭りに参加する予定でしたが、その
祭りを含めて、イベントはいっさい中止
になりました。

また原発事故が発生。津波の直接的な
被害も合わせて川俣町に避難してくる方
も多く、遠藤さんは、避難してきた人たち
の生活物資の配布などボランティア活動
に奔走しました。

ところが時間が経つことに放射能によ
る避難指示の同心円状の輪が広がってき
て、「山木屋も、もしかしたら」と思ったそ
うです。そして、2011年4月22日、山
木屋地区は、川俣町では唯一、計画的避難
区域に指定され、住民が計画的に避難す
るよう促されました。

遠藤さんの父親姉と兄は仕事のため
に、震災とは関係なく他県で仕事をして
おり、山木屋にいた遠藤さんと母親は必
要最小限の荷物だけ持って、山木屋地区を
出て、車で20分ぐらいの町内のアパートへ
避難しました。この時期は遠藤さんを含
め、地域全体が混乱、パニック状態でした。
山木屋太鼓では計画的避難区域の指定
になる前、なんとか集まって練習を再開し
ましたが、遠藤さんには「太鼓の練習をこ
こで続けられるのだろうか」という不安と
疑問が押し寄せていました。

会場を探して、 練習再開へ

避難後は練習再開について賛否両論が
ありました。「練習に行きたいけれど、行け
ない」「今は太鼓をやる場合ではない」とい
う人、太鼓に対する気持ちが離れてやむ
を得ず辞めてしまったメンバーも。

それでも、山木屋地区住民の避難先
での生活が少しずつ落ち着いてきた
2011年9月ごろ、ようやく川俣町内で
会場が見つかり、練習を再開しました。し
かし近隣に家があり、夜の練習ということ
もあり、音漏れの心配から太鼓に毛布を
かけて練習するなど工夫しました。子ど



現在の練習風景。真剣に練習する子どもたち

もたちの減少により、鼓孤と鼓魂を再編・
合併して、「鼓龍」として新たなチーム構
成も行いました。
ところが、避難生活そのものが長引く
につれて、「この生活がいつまで続くのか」
という思いが強くなっていきました。生活
環境の変化によりメンバーの減少が年々
進む中、今後の活動への不安は大きくな
るばかり。現在の防音環境の整った川俣
町中央公民館で練習できるようになった
のは、その6年後、2017年のことでし
た。

2012年、 米ワシントンD.C.への 演奏公演

山木屋太鼓のメンバーに大きな転機が訪れます。全米桜祭実行委員会とワシントンD.C.日米協会から、アメリカ・ワシントンD.C.の桜祭りでの演奏のオファーが入ったのです。当時、メンバーの中には先行きの見えない避難生活のなか、気持ち沈みこんでしまう人も多く、また今後、活動を継続していくことへの不安やためらいを抱く人もいました。しかし、全く違う環境での演奏公演のオファーに、遠藤さんらメンバーは「ぜひ行ってみたい」と渡米を決意しました。

そしていよいよ桜祭りが開幕。1ヶ月かけて船便で山木屋から持ってきた太鼓を、桜祭りの会場で力強く鳴らす打ち手たち。その太鼓の音に、聴衆は体を揺らし、手拍子をし、「エキサイティング!」の掛け声。会場は興奮と熱気でいっぱいになりました。打ち手もパワフルな感動に包まれ、太鼓ができる楽しさ、聴衆と感動を共有できる喜びを深く実感しました。

遠藤さんは、この経験が山木屋太鼓の「再起」につながったと語ります。

「太鼓の音が地震を連想させてしまうかも知れない、という不安があったのです

が、実際に演奏してみたら聴衆が喜んでくれているというのが目に見えてわかりました。太鼓を打つのは『悪いこと、やらない方がいいこと』ではない。これをきつかけに、もう一回頑張ってみよう、と、迷いが吹っ切れました。私だけでなく山木屋太鼓全体がそう感じたのではないでしょうか」。

その後、2013年にはメンバーの年齢が上がって社会人が増え、生活環境などにより「山猿」が解散。その後子どもたちの見本となるチームの再編を行い「鴉(からす)」が誕生(現在は鴉、朱雀ともに解散し、実質チームとしての活動はしていません)。その後はより山木屋太鼓全体で結束を図り、前進すべく衣装を統一しました。2015年には15周年記念公演を開催。これをきっかけに、2023年までに1度の自主公演を開催してきました。また様々な機関の協力を得て、太鼓体験会も数年にかけて行い、現在では町内、福島市内からも子どもから大人まで新たなメンバーが参加してくれています。



桜祭りでの植樹の様子=米ワシントンD.C. 公演



単身渡米、繋がりを作る遠藤さん＝米ミシガン州



米ミシガンへー コンサート開催

さらに震災から5年が過ぎた2016年。アメリカ、ミシガン州での演奏を成功させます。きっかけは、ミシガン在住の映像作家、椎木透子(しいき・とうこ)さんとの出会い。彼女は映画『スレッショルド ぶくしまのつぶやき』の撮影で来日しており、ありのままの震災後の福島の様子を捉えた作品を作ろうとしていました。その中の一部として山木屋太鼓も撮影されました。

そのご縁から、ミシガンで山木屋太鼓のコンサートをやってみたく、福島の今を伝えたいという気持ちでメンバーの中で強くなり、椎木さんと渡米の計画を立て始めました。

遠藤さんは、「メンバーの数は減っているけれど、2015年に自主公演ができました。これからは、自分たちが太鼓を使って山木屋や福島の現状を発信する時だ。マイナスイメージをプラスのイメージに変えていきたい」と当時を振り返ります。

しかし、前回のワシントンD.C.公演とは状況が違い、まずは資金面での問題に直面しました。ミシガン大学の関係者や

現地の方々が協力して体制を整えてくれ、日本から太鼓を持っていくのではなく、現地にある太鼓で使えるものを使うことに。同時に、自分たちでも初めてクラウドファンディングをして、渡航費の一部を確保しました。準備にかかった時間は約2年。その間、遠藤さんが単身渡米して演奏をして、交流の糸口を作りました。

実際に渡米したメンバーは10名。「福島を伝える」という大きなミッションをしっかり認識し、全力で熱演。その合間には、通訳を介しながら、山木屋地区、福島の現状や山木屋太鼓のこれまでの経緯などを、自分の言葉で紹介しました。

現地では地元和太鼓団体との交流や、ミシガン大学の学生と共演、またワークショップをしたりと、和太鼓演奏を通じて様々な経験を重ねました。

「1日1日が濃厚でした。太鼓の魅力を十分に伝え、福島の震災のことも知ってもらえました。とても楽しく、感謝の連続でした」と、遠藤さんは振り返ります。

帰国後は、支援への感謝と、活動報告として、「ミシガン公演感謝コンサート」を川俣町で開催。

この年は、震災後の山木屋太鼓の活動が評価され、「JASRAC(ジャスラック)音楽文化賞」を受賞しました。



躍動感あふれる演奏が魅力の遠藤さん

ソロ活動も開始

遠藤さんは、2013年にそれまで務めていた会社を辞め、以降は和太鼓奏者としての人生を歩んでいます。ソロの演奏様々なライブステージ、また県内数カ所での太鼓指導、作曲活動を通じて太鼓の楽しさを体験する機会を増やしています。その繋がりや経験を山木屋太鼓や故郷に還元できればと考えています。

「本当に太鼓は楽しいです。それを知っ

てもらったのが一番で、楽しさがないと続かないですよ。これまでの活動を通じて、私自身も改めて、太鼓が楽しいということに気づけたきっかけがたくさんありました。震災から現在まで、大変な12年でしたが、その大変さを超えて『やっぱり太鼓が楽しい』と実感しているのは、私にとって大切なことです。よっぽど太鼓が好きで、ふるさとが必要だということに気づかせてくれたのが、震災なのかなと思います」と遠藤さんは語ります。

これからの活動

最後に遠藤さんに、今後の活動について伺いました。

「太鼓を打っているメンバーが、シンプルに太鼓が楽しいと思えるようにしていきたいと思っています。多くの人たちに応援してもらっているから、楽しいと気づけまます。感謝を忘れず演奏してほしいと思います。それが子どもたちにとっても大人にとっても、自分が住んでいるところに誇りを持つことにつながるはず。『ああ、山木屋はいいところだよ』と、大人になっても気づける。太鼓があるから集まれるということはとても貴重なことだと思います。そして、『今までと変わりなく継続していきたい、純粹に楽しく、私たちがらしく、感謝を忘れずにやっていきたいと考えています』」。

遠藤さんと山木屋太鼓のメンバーは、これからも、山木屋の自然を太鼓で表現し、伝える活動を通じて、多くの人たちに、山木屋の素晴らしいさを伝え、歴史を刻んでいくでしょう。



採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujo

志ある中小企業経営者の応援団として「採用から共育」まで一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR（社会貢献活動）を活用した「いい会社創り」のサポーターとして定評がある。



YELL

Vol. 24

2023年8月1日

発行：採用と教育研究所
〒960-8055
福島県福島市野田町 6-7-8
電話 024-529-5153
info@saiyoutokyouiku.com

